

グローバル

第 16 号



フェリス女学院大学大学院国際交流研究科

目 次

安部公房の初期作品に関する文献

鳥羽耕史と呉美妊による「S・カルマ氏の犯罪」について

オルネド・ルシア ……… 1

日本における自然療法の普及の経緯と今後の展望

——自然療法を若い世代に広めていく可能性を探る——

大木 麻由佳 ……… 5

安部公房の初期作品に関する文献

鳥羽耕史と呉美姫による「S・カルマ氏の犯罪」について

オルネド・ルシア
指導教員 寺尾 隆吉

はじめに

本論では、博士論文を書くために参考している資料を解説することは目標とする。博士論文で対象としている安部公房の初期作品を分析する際に、現在に活動をしている研究者の最近の論文を参考にしたい。その中から今回は、二〇〇七年に発表された鳥羽耕史の『運動体・安部公房』と二〇〇九年に発表された呉美姫の『安部公房の〈戦後〉植民地経験と初期テキストをめぐって』を比較しながら、特に安部の「S・カルマ氏の犯罪」に集中し、二人の研究者がこの作品をどのように読み取っているのかを明らかにしたい。

まず研究者を簡潔に紹介する。鳥羽耕史は一九六八年に東京に生まれた。北海道大学文学部を卒業した後、早稲田大学大学院文学研究科に進学した。博士を修了し、現在は早稲田大学文学学術院で教授として研究を続けている。特に安部公房を中心に、戦後の労働者や学生らによるサークル運動や、一九六〇年前後に〈記録芸術の会〉に集まることになる文学者、画家、映画監督らによる、広い意味での「記録」の運動について研究している。

呉美姫は一九七〇年に韓国慶州市に生まれた。高慶大学校文科大学日本語文学科を卒業した後、東京大学大学院人文社会系研究科に進学し、二〇〇四年に博士過程を修了した。現在は東京大学文学部外国人客員研究員として活動している。

一、異なるアプローチ

鳥羽耕史と呉美姫の本の相違点はどこにあるのか考えていきたい。まず二つの本のタイトルとそのプロローグを読むことによって、二人のアプローチは異なることは明白である。鳥羽は安部が参加した「運動体」に焦点する。戦後初期から一九五〇年代にかけて、安部の運動は三つの段階に分けられると主張する。まず「芸術の革命を目指すアヴァンギャルドの運動体」だった。その後マルクス主義や日本共産党に近づき、「安部の運動体は政治的な革命を目指す方向に再編成された」。そして運動体の最終段階において、「〈記録〉と認識によって現実を変革する方向へとシフトする」（鳥羽：6）。鳥羽の分析には、思想やイデオロギーはキーポイントとなる。一方呉は歴史的な視点から安部の作品を読み返す。呉にとっては、安部の文学を読み取る際に、〈満州〉という植民地で育った事実は非常に重要となる。呉の視点から見ると、敗戦状況における「外地」日本人のアイデンティティ・クライシスやアメリカ占領の現実がどのように形象化されることはキーポイントとなる。

このように二つのアプローチは異なることが分かったが、具体的な作品を解釈する時点では、この相違はどのように働くのかを見ていきたい。そのために論者の研究にも扱っている「S・カルマ氏の犯罪」に対象を絞り、二人の研究者はこの作品をどのように読み取るのか見ていきたい。

二、鳥羽耕史による「S・カルマ氏の犯罪」

鳥羽はこの作品を「芸術運動と文学」という第二部の中、第六章「共同制作としての物語 一初版『壁』

1951」と第七章「S・カルマ氏の剽窃 ―初出「壁」1951」で論じる。

第六章では、作品初版の桂川寛による挿絵と石川淳による序文を分析し、「S・カルマ氏の犯罪」を共同的に制作した作品として考える。挿絵に関しては「単に文章の絵解きをする通常の挿絵の役割にも止まらない機能を果たしている」と指摘する。実は「これらの挿絵は、本文との微妙な齟齬と連携のあいだを揺れてうごきつつ、本文に従属する挿絵とは呼ばないような創造的な関係を本文との間に持ちながら、読者のイメージ形成を豊かにする役割を果たしているのだ」（鳥羽：112）と論じる。安部と桂川も属した〈世紀の会〉で絵を媒介としたコミュニケーションが成立していたように、この作品における挿絵も、文章の展開に大きな役割を果たす。

この作品を全体的に見ると、「勅使河原宏の装幀、扉の肖像写真、桂川寛の挿絵、石川淳の序文といったものがあいまって形成されている『壁』は、必ずしも「安部公房」という著名の下に置かれぬ、共同制作としての書物なのである」という結論に達する（鳥羽：121）。

第七章では、「S・カルマ氏の犯罪」の影響関係の問題について考える。「S・カルマ氏の犯罪」はカフカの『審判』、キャロル、シャミッソーの『影をなくした男』、ドフトエフスキーの『二重身』^{ドッベルゲンガー}、ゴーゴリの『鼻』、ヘッセの『荒野の狼』、アンデルセンの『影』などと比較された。これに関しては、鳥羽が植谷雄高と同様に、様々な影響を融合した安部は名譽的であると考えている。「S・カルマ氏の犯罪」では、出来事が一見して関係のない様々な場面を通じて進んでいき、「寄木細工のように様々なパーツで組み立てられ、個々のパーツの出典は明らかなのだが、全体としてはどれに似ているのかわからないのがこの小説なのだ」。その意味で「借物のパーツでできた小説が、単なる剽窃には終わらず、コラージュやパッチワークのように新たな表情を帯びていることを指していたと考えることができる」（鳥羽：127）。

しかし鳥羽にとっては、「S・カルマ氏の犯罪」の最も大事な影響はマルクスの『資本論』である。「S・カルマ氏の犯罪」の様々なエピソードを書くには安部が『資本論』から例示や隠喩の言葉を借用し、その字義通りの意味で用いながら物語を展開させたと鳥羽が指摘する（鳥羽：136）。例えば、「S・カルマ氏の犯罪」の次の引用を見てみよう。

右の眼と左の眼とではちがったものに見えるなんて随分滑稽なことだ。おそらくマルクスの影響に違いない。

鳥羽にとっては、「容易に政治的右翼と左翼の連想を呼ぶだろう。左の眼ではモノとしての名刺―唯物論的な自体―が見え、右の眼には社会的に共有されている仮像が映るというのも、あからさまな仕掛けと言ってよい」（鳥羽：128）。

ストーリーを展開するには、言葉やことわざの文字通りの意味を用いるという手段は、「バベルの塔のためき」や「詩人の生涯」などでも見られるが、『資本論』を参考として考える鳥羽の分析は興味深い。

そして「S・カルマ氏の犯罪」と関連づける既存テキストの中から「デンドロカカリヤ」も大事な役割を果たすと鳥羽が論じる。彼にとっては、「『壁』が『審判』をはじめとする様々な先行テキストの再現であることは既に見たが、それはまた「デンドロカカリヤ」の再現でもある」（鳥羽：137）と指摘し、二つの作品の間に様々な関連をつける。

三、呉美姫による「S・カルマ氏の犯罪」

呉は「戦後表象としてのメタモルフォーゼ ―『壁』論」という第三章でこの作品を論じる。

「S・カルマ氏の犯罪」を執筆された時期を分析する際に、呉も安部の共産党主義者としての活動を強調する。「この時期、明らかに安部公房は文学に対して政治の優位性を認める立場に近づいていた」（呉：64）と指摘する。しかし安部における〈植民地経験〉の再解釈という過程も力説する。安部は（共

産党の一つの分裂である)「所感派」に「近い立場から入党したことによって、アメリカの植民地からの独立という反米愛国主義に強く影響され、こうしたスタンスは「国民文学論争」の折りに明白に現れることになる。そのスタンスが自らを〈植民地経験〉の再解釈へと導いたものと考えられるのである」(呉：64)と述べる。

また呉の主張では、時代背景も同じく重要で、当時を説明する歴史研究者の資料も考慮に入れる。「S・カルマ氏の犯罪」に八回も出てくる〈虚脱感〉や五回に出てくる〈羞恥心〉という言葉は丸山真男が戦後の日本人の感情を説明する文章と関連づける(呉：75)。その連想で、S・カルマが名前を失ったことは〈戦争〉の記憶のためであると論じる。このように呉にとっては「名前と実体の分離という変形は、戦争のトラウマが露呈した形にほかならない。主体として行動できなかつた「ぼく」の愚かさは自らを客体にしてしまい、その結果、名刺との分裂に羞恥心と虚脱感を感じるほかなくなってしまうのである」(呉：76)。

このように主張していく呉は、S・カルマの変身を次のように説明する。「戦争に対する責任を果たせなかつた「ぼく」の罪に対する、自らへの罰として、メタモルフォーゼは表象されている」と結論する。

最後に未だ十分に注目されていないS・カルマ氏の「パパ」の問題について考察する。呉にとっては「パパ」は日本を占領したアメリカを表象する。「後ほど「パパ」は「ユルバン教授」であることが知られるが、そこでも片仮名でしか表記されていない。〈父〉ではなく「パパ」でしかない理由、それは「ドクトル」という人物に象徴されるアメリカの影が落とされているとしか考えられまい」(呉：81)と説明する。壁に変身する前に、S・カルマを見捨てられた「パパ」は、彼にとって父としてありえなくなると思い、「〈父〉の否認を経て、「ぼく」は〈父〉への復讐と断絶を図ることになる。「ぼく」の胸を解剖しようとする彼らを涙の洪水で溺れさせ、撤退させる作戦を取ったのである。それは明らかに、父を殺し、父と断絶しようとする欲望の現れである」(呉：83)と呉は指摘する。父の問題は安部の他の作品にも見られるが、呉は次のように解釈する。安部の「〈戦後像〉にはトラウマ化した戦争の記憶を外在化させ、戦中のおのれの無力性を封印しようとする〈父〉の暴力との対決を通じて、新たな領域へ飛翔しようとする展望が表れている」(呉：84)。それは「自らに傷痕を〈父〉との対決を通して捉えようとするその姿勢にこそ、作者が Kommunismus へ共鳴した結果が表れているといえよう」(呉：85)というのである。

終わりに

安部公房の初期作品を考える際に、鳥羽と呉の研究は考慮すべき参考文献である。彼らは安部の作品を様々な資料や事実と豊かに関連づけ、現代的で完全な視点から安部の作品を改めて考えさせるからである。綿密に作品の細部まで考える鳥羽と呉の研究を読み、多くの可能性が広がり、安部の作品をさらに豊富な読み取りができる。

以上に説明したように、鳥羽と呉が強調するポイントは異なるが、彼らの解釈は互いに排除するわけではない。逆に、二人の提案を補足することによって、安部の作品をもっとグローバルな目で見ることができるといえる。

個人的に、今まで十分に考慮していなかつた要素を気づかせ、論者の主張も展開することができた。そして、ほかの論文で未だ見つかつていなかつた、自分の仮説を追認することもできた。

[主要参考文献表]

鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、2007年

呉美姫『安部公房の〈戦後〉植民地経験と初期テキストをめぐって』クレイン、2009年

早稲田大学の鳥羽のプロフィール：

<http://researchers.waseda.jp/profile/ja.702e6ebb0f1c062bfc79cce2226e4c52.html>

日本における自然療法の普及の経緯と今後の展望

——自然療法を若い世代に広めていく可能性を探る——

大木 麻由佳
指導教員 佐藤 輝

はじめに

自然療法はいつごろから日本で普及しはじめ、現在ではどのような市場の傾向がみられるのだろうか。1987年のバブル期にフレンチ料理の多くのシェフがフランスへと旅立ち、帰国後に積極的にハーブを取り入れるようになり、ハーブ市場が1996年から拡大するきっかけとなった。また、同時期にアメリカでは西洋ハーブなどを積極的に取り入れる代替医療が推進されており（Health net media）、日本でも米国の流れを受けて、日本補完代替医療学会、日本代替・相補・伝統医療連合会議（JACT）、日本薬用食学会などが1998年から1999年にかけて次々と創立された。米国で人気のある代替療法はカイロプラクティック、鍼灸、漢方、ハーブ（薬草）などの栄養療法などだが、日本ではどちらかという食品の機能性による栄養療法に関心が集まっている。（Health net media、2000）

日本での様々な自然派商品は、化学薬品に頼らない成分でつくられており、積極的に選択していくことによって自分の健康を維持・向上させることもできる。しかし、日本での代替医療に対する関心は外国に比べてとても稀薄に感じられる。ヨーロッパでは、代替医療という表現はあまり用いられず、補完あるいは相補医療と呼ばれ、主流の医療を補う重要な定義づけがなされているものの、日本では科学的未検証および臨床未応用の医学・医療体系との位置づけとなっている（中村、2008）。

女性には、ホルモンの変調期（思春期、出産期、更年期）において体調を崩してしまったり、体質が変わってしまったりするため（北條、1998）、女性の更年期の症状（のぼせ、冷え、手足のしびれ等）に対しても漢方薬が望ましいといった研究もある（佐藤、2014）一方、中吉ら（2006）、Takata *et al.* (2014) によると、女子大学生は、男子大学生よりも代替医療に肯定的で積極的な姿勢があるとのアンケート結果が得られている。特に若い女性の健康・美容上のトラブルに対処するための選択肢の一つとして代替医療・自然療法がもっと見直され、採用されてもよいのではないだろうか。

そこで、これらの商品がどれほど消費者、特に若い世代に認知・使用されているのか把握する必要があると考えたが、このような研究事例はほとんど見られない。従来の店頭での対面販売だけでなく、インターネット上にも多くの通販サイトが存在する。サイト利用者は、そこへ投稿される商品の口コミを参考に商品を購入することが多く、これら商品のレビューを始め最新の情報を拡散する役割を担っているのは女性（NTTコムリサーチ、2012）が多いのではないかと筆者は考える。そこで今回は、筆者の所属するフェリス女学院大学に通う女子大学生を若い世代の代表例としてアンケート調査を行うことにより、若い世代が感じるこれら自然派商品への印象を調査すると共に、現状の使用状況についても同時に調査し、今後の普及の可能性・意義を考察することとした。

1. 女子大学生の自然派商品の使用状況を探るためのアンケート調査

1.1 調査の目的

漢方や鍼灸などの代替医療は、日本では高齢者が最もよく利用する（福田ら、2006）。ハーブを始めとする自然派食品も漢方と同様にまだまだ知名度が低いのではないだろうか、という疑問から、女子大学生の自然派商品に抱く印象や現在の使用状況を、アンケートを用いて調査した。

1.2 調査項目

1. 学部・出身地……アンケート調査を行った対象の所属の傾向を確認する為に設定した。出身地によって自然派商品への印象の差があるかも検討する（未集計）。
2. 改善したい体調と体質……代表的な女性の抱える体調の悩み、体質を選択してもらった。
3. 自然派商品の使用経験の有無、および感想……ハーブティー、のど飴、冷え性改善の為の漢方薬、入浴剤、ハーブサプリメント、自然派化粧品、スーパーフード、便秘薬の全8項目を設け、それぞれ使用の有無、それら回答に対する感想や印象を記入してもらうことで、若い世代が抱く自然派商品への総合評価を明らかにする。

1.3 調査結果

90名から回収したが、選択肢をすべて回答した有効回答者数は76名であった。

1. 改善したい体調と体質

最も多かった症状は生理痛（33人）、冷え性（30人）だった。3番目に多かった頭痛の上位3つを見ると、いずれもはっきりと効果を期待できる薬があまりないものが多く、慢性化しやすい女性特有の病気であることがわかった。

2. 自然派商品の使用経験の有無、および感想

①ハーブティー（省略）

②のど飴

のど飴は使用経験者が非常に多く（65名）、中でも「効果的だった」と回答する人が他の項目と比べて最も多かった（49名）。2017年1月現在、通販サイト「爽快ドラッグ」では約166種類、大手通販サイト「楽天市場」では約158種類ののど飴が確認できた。今回、アンケートをとった項目の中では最も消費者に浸透している自然派商品であろう。なお、使用経験者の中で「非継続」と答えた人の理由は、風邪をひいたときのみ使用する、といった使用期間が限られているという理由がほとんどであった。

③冷え性改善の漢方（省略）

④入浴剤

入浴剤にはリラックス効果や冷え性改善、血行促進作用がある。入浴剤の使用経験者43名のうち27名が「効果がある」と実感していた。入浴剤には多くの種類があり、また価格も安価なものが多いので若い世代にも受け入れやすいと考えられる。継続している人も多いが（18名）、同時に非継続と回答した人も多く（11名）、これは家族で住んでいるために頻繁に使用できない、あるいは、一人暮らしなのでお湯を沸かすことがあまりないため、といった回答が多かった。

⑤ハーブサプリ（省略）

⑥自然派化粧品

様々な項目の中で、最も使用経験者が多く（43名）、かつ「継続している」と回答した人が多かった（26名）。中でも「効果的だった」という回答が圧倒的に多く（26名）、一方で使用経験のない人（33名）には「興味がない」と回答した人もいた（8名）。これらのことから、化粧品に特にこだわりがないのか、もしくは、愛用する自然派商品があるのではないかと考えられる結果となった。

⑦スーパーフード（省略）

⑧便秘薬（省略）

1.4 考察

上記8項目の自然派商品の使用の有無をアンケートで集計した結果、使用経験が多く、今も継続して使用していると回答した人が多かった項目は、「のど飴」と「自然派化粧品」だった。これはハーブティー

や漢方薬などと異なり、身近な商品であるということ、そして入浴剤のように使用する環境を限定しないという点が使用者数を伸ばしていると考えられた。

したがって、のど飴と自然派化粧品は今後、ハーブを始めとする天然由来成分の製品を知るきっかけの一つとなる可能性が非常に高いのではないかと、筆者は考える。のど飴は医薬品、医薬部外品、食品の3種に分かれているほど制約も厳しく、すでに市場が飽和状態である。一方、これから先、新たな商品展開が可能なもの、また自分でも手軽に作ることでできる商品として「自然派化粧品」に焦点を当てて、さらに詳しくアンケートを実施することにした。

2. 女子大学生の肌トラブルとその対処法に関するアンケート調査

2.1 調査の目的

上記のアンケート調査における自然派商品の中で利用者数も多く、効果が見られたという回答の多かった「自然派化粧品」に焦点を当てた。肌トラブルを抱える現代の女子大学生が主に使用しているスキンケア商品を調査し、それらが自然派か否かをアンケートによって調査した。また同時に、一般的な自然派商品に対する若い女性の印象も調査することによって、自然派商品への印象の良さ悪しは、実際に自然派商品を使用することに関連性があるかどうかを明らかにした。これらをつうじて若い女性を対象にした、今後のハーブを始めとする天然由来の商品の販売展開に関する方向性、および自然療法の普及のあり方を考えていく。

2.2 調査項目

1. 学部・出身地……アンケート調査を行った対象の所属の傾向を確認する為に設定した。また、出身地によって自然派化粧品への印象の差があるか調査をする（未集計）。
2. 改善したい肌トラブル……「シャレコ美肌カレッジ」に記載された症状別肌トラブル講座を参照し、女性に多いとされる肌トラブルを列挙した。
3. スキンケア商品の使用の有無、および種類傾向……日頃からスキンケア商品を使用しているかどうかを二択で回答してもらった。また、その後、使用者には主な商品名と並んで、自然派か非自然派かを選択してもらった。
4. “自然派”に対するイメージ……“自然派”の商品と聞いて感じる印象として10項目を設定し（1. 信頼できる、2. 肌に良さそう、3. クリーンな印象、4. 使ってみたい、6. 積極的に取り入れたい、7. 価格が高い、8. 年齢層の高い人が使う物、9. 効き目がありそう、10. 成分が気になる）、それぞれ4つの項目（とてもそう思う・そう思う・そう思わない・全くそう思わない）のうち、どれに当てはまるかを記入してもらった。これによって、自然派商品を使用している人と、使用していない人のあいだに印象の差があるかを検証した。
5. 自然派だと感じさせるキャッチフレーズ……「アットコスメ」のレビュー内に多くある自然派商品に対する感想を参照し、“自然派”だと感じるキャッチフレーズを選択してもらい、どのような言葉が現代の若者の琴線に触れる言葉なのかを調査した。
6. スキンケア商品以外の改善策……日常的な肌トラブル対処方法を調査した。

2.3 調査結果

フェリス生123名から有効回答を得た。

1. 改善したい肌トラブル

最も多かった肌トラブルは乾燥肌であり（72名）、次いで、にきび（62名）、毛穴の開きと肌荒れが同じ48人という回答だった。上位3つは全て関連性のある症状であり、乾燥肌が原因でにきびと毛穴

のトラブルが起こると考えられるため、スキンケアの必要性が伺える。この結果を踏まえた上で、以下のアンケートの結果を考察していく。

2. スキンケア商品の使用の有無及び種類傾向

スキンケア商品に関しては、回答者のほとんどが日頃から「利用」していた（118名）。また、利用している人のうち、自然派が49名、非自然派が63名となった。商品名を記入する欄を設けたが、ほとんど詳しい回答は見られず、自然派化粧品を使う人の多くはハトムギ化粧水と回答した。一方、非自然派の人では病院で処方された薬、や未回答が多く目立った。

3. “自然派”の商品全般に対するイメージ（省略）

4. 自然派だと感じさせるチャッチフレーズ（省略）

5. スキンケア商品利用以外の改善方法（省略）

2.4 自然派化粧品の使用の有無と自然派商品イメージとの関連性の検証（省略）

3. アンケート調査を終えて

今回、2種類のアンケートを行うことで、女子大学生における自然派商品、特に自然派化粧品についての使用状況と印象を知ることができた。1回目、2回目のいずれのアンケートにおいても、自然派商品へのマイナスのイメージがほとんどなく、興味のある人が非常に多いことがわかった。しかし、同時に漢方やハーブティーなどの少しコアな商品になると途端に使用者や興味のある人が減る傾向にあった。また、自然派化粧品は年齢層の高い人が使うものであるという印象を持つ人も多かった。したがって、自然派商品が普及しない主な原因は、20歳前後の女性が手にする、あるいは目にする機会が少ないことによると筆者は考えた。

例えば代表的な自然派商品としてのハーブティーとは、ティーバッグに包装されたものも発売されているものの、本来の消費形態としては、自ら好きな味、薬効を求めてブレンドして作るものである。ハーブショップには多種多様なドライハーブが販売されていて、様々な味を試して好みの味を探すということがハーブティーを味わう一つの醍醐味である。しかし、大学生にハーブを一つ一つ選択して、ブレンドし、好きな味を探すような自由な時間はそれほどない。また同様に、自然派化粧品についても自分で調合する時間はなく、加えてゆったりとその効果や香りを楽しむ時間の余裕が存在しないだろう。若い世代は自然派商品に興味を持っているにもかかわらず、それらを十分に楽しむ時間がない、そしてハーブに触れる機会が極端に少ないという理由が挙げられるのではないだろうか。

ただし、1回目のアンケートから明らかになったように、若い女性向けのハーブの浸透をめざした新たな商品開発の可能性として、のど飴と入浴剤には期待を寄せたい。スーパーフードのブームのように、ハーブの入門としてヒット商品が生まれれば、長期的な自然派商品の拡大が実現できるかもしれない。若い女性が自然派商品に少しでも触れておくことによって、20代、30代の子育ての際に家族の健康維持への追求につながるであろうし、40代、50代になったときの自分の体調変化に対処する自然療法や、健康増進のための趣味のハーブ利用につながるのではないだろうか。したがって、若年層への自然派商品の普及の意義として、加齢を見越した健康への理解や気づきが得られる点がきわめて重要である。また、この意味で、すでにかなり普及している自然派のスキンケア化粧品の存在価値は大きいと言える。

今回、アンケートの集計に手間取ってしまったため、先行研究等を探す時間が十分になかった。しか

し、過去に似た研究がないか、もしくは化粧品会社などのアンケートで類似の結果を得た調査がないかどうかを検索する予定である。また、これらのアンケート結果を参考にして、様々な年齢層が抱く自然派商品への印象を検証したり、日本の消費者の自然派商品への印象と海外のそれとを比較したりして、日本での長期的なハーブ市場の拡大にむけた研究をさらに進めていきたいと考えている。

[参考文献]

- 佐藤廣康 (2014) 「伝統医療 (漢方薬) と近代医学の統合と融合」『日薬理誌』第143巻、56～60ページ。
Takata, T., Kuramoto M., Imamura M., Kishida S., Yasui T. (2014) Gender differences in attitudes regarding complementary and alternative medicine among Health Care Profession students in Japan. 『日本補完代替医療学会誌』第11巻第 2号、81～88ページ。
Health net media「米国・代替医療への道」
〔<http://www.health-station.com/d-1.html>〕 (最終閲覧日 2017.02.06)
Health net media「代替医療は疾病にどの程度有効なのか～日米で徹底検証開始」(2000.04)
〔<http://www.health-station.com/topic-108.html>〕 (最終閲覧日 2017.02.06)
NTTコムリサーチ 「「購買行動におけるクチコミの影響」に関する調査」
〔<http://research.nttcoms.com/database/data/001436/>〕 (最終閲覧日 2017.02.06)
中村直行 (2008) 「わが国の代替医療の現状とその市場規模」『社会科学論集』(埼玉大学経済学会誌) 第124巻、69～91ページ。
中吉隆之・王 財源・吉備 登・山本博司・鈴木けい子・高橋研一「代替医療に関する意識調査」『関西鍼灸大学紀要』第3巻、35～39ページ。
福田ら (2006) 「現代西洋医学以外の伝統的医療・治療の使用と健康問題に関する実態調査」『日本公衆衛生雑誌』第53号第4号、293～300ページ。
北條祥子 (1998) 『よくわかる環境ホルモンの話 ―ホルモン攪乱作用とからだのしくみ』合同出版。

グローカル — 第 16 号 —

2017年 発行

発行者 大西 比呂志

発行所 横浜市泉区緑園 4-5-3
フェリス女学院大学大学院
国際交流研究科
電話 045-812-8283